

P3-6 近隣資産を活かし住民協働のウォークイベントを通じた健康づくりの取り組み

○高井 逸史¹⁾、片岡 勇樹²⁾、山城 雄馬³⁾、小山 恵理子³⁾、松原 賢典³⁾、高宮 昭仁⁴⁾、藤井 大輔⁴⁾、陶器 俊博⁵⁾

1)大阪経済大学 人間科学部 人間科学科、2)株式会社りーどけあ、3)シャローム株式会社、4)地域ケアステーション八千代・訪問看護ステーション、5)清恵会三宝病院

Key word：近隣資産，住民協働，ウォークイベント

【目的】 われわれは昨年、地域の歴史や自然など近隣資産を活かし、地域住民と協働したウォーキングイベント実施した。そこで本研究では、参加者のアンケート結果を分析し、健康づくりの視点から高齢者にとって望ましいウォーキングイベントのあり方を明らかにすることを目的とした。

【方法】 昨年度の堺市泉北ニュータウンまちびらき50周年事業において、泉北ニュータウン(以下、泉北NT)全域を6コースに分け、5月から12月の8月と9月を除く期間に実施した。子どもから高齢者まで、誰もが参加できるように、コースの距離は約5~7kmに設定した。本イベントのねらいは、泉北NTにある緑地や緑道、神社仏閣など近隣資産を活用したウォーキングを通じ、住民同士のつながりを深め、健康づくりの意識を醸成することであった。また、各コースの近隣資産については、その地域の自治会や歩こう会の住民から情報収集を行った。全コースとも「神社仏閣」に立ち寄り、そこで歴史講座を実施し、さらには歩行器など歩行支援用具の「体験コーナー」も設定した。参加者は終了時アンケートを記入してもらった。アンケート項目は性別、年齢、在住校区、ウォーキング習慣の有無やその時間、神社仏閣のお話や歩いた感想については「大変良かった・良かった・あまり良くなかった・良くなかった」の4件法で回答を求めた。「神社仏閣」と「体験コーナー」については、「男/女」と「前期高齢者/後期高齢者」との関連性を調べるため、クロス集計を行い、Spearmanの順位相関係数を用いて検討し有意水準は5%とした。

【説明と同意】 アンケート記入に関しては、あらかじめ使用目的を説明し同意を得て記入してもらった。

【結果】 6コースの平均参加数は約52人、その内訳は男性約42%、女性約58%であった。参加者の約72%がコース付近の校区在住者であった。ウォーキング習慣は参加者の約42%。神社仏閣の感想は約86%が「大変良かった」または「良かった」という結果であった。一方、体験コーナーでは約62%が「大変良かった」または「良かった」という結果であった。さらに、神社仏閣と体験コーナーのクロス集計の結果、神社仏閣と「男/女」に有意差がみられた($p < 0.05$)。体験コーナーにおいては、有意差は確認できなかったが、前期高齢者の方が後期高齢者より「あまり良くなかった・良くなかった」が多い傾向がみられた。

【考察】 われわれは、昨年2月に療法士のみならず看護師や薬剤師、管理栄養士など医療従事者が集う法人化の団体を設立した。設立の趣旨は、われわれの専門性を活かしたプロボノ活動を通じ、地域住民のつながりや健康づくりを支援することである。アンケート結果から、女性の参加者の割合が多かった。これは、コース付近の校区在住者の参加割合が高かったため、近隣の女性同士がグループで参加した結果と考えられる。さらに、各コース周辺の高齢化率との関連性を検討したところ、高齢者率の高い校区ほど女性の割合が多くなる傾向がみられ、高齢化率も性差に影響した可能性が考えられる。男性の割合が女性より多いコースがひとつだけあり、そのコースに全国的に有名な神社が含まれていたことが要因であると考えられる。近年、男性高齢者の閉じこもりが社会問題になっているが、「神社仏閣」など男性高齢者が参加したくなる企画を考案する必要がある。体験コーナーについては、概ね前期高齢者にあまり良くないという感想が多かった。前期高齢者は後期高齢者に比べ、歩行支援用具の必要性をあまり感じておらず、その結果になったと考えられる。孤立化しやすい男性高齢者を地域の健康づくりに参加させるには、神社仏閣を巡り歴史をテーマとした散策スタイルが望ましいと考える。

【理学療法研究としての意義】 地域包括ケアシステム深化のためには、理学療法士は他職種と連携し、地域の近隣資産を活かし、地域住民や自治会等と協働した健康づくりのイベントに参画することが求められている。